

はしがき

■ 編集の趣旨

この《10日で確認 新チェックノート》シリーズは、国語の主要分野について、短時間で集中的に知識の整理・確認をすることを目指して編集しました。

したがって、受験直前における知識の最終確認、少し早めの苦手分野の克服などに使用すると効果的です。

本書はこのシリーズの一冊として、古典文法の「識別・敬語」の重要事項をまとめました。

■ 本書の特長

- 1 識別編が7日分、敬語編が3日分で、それぞれ一日分を4ページに収めました。
- 2 識別編では約40項目を五十音順に配列したので、ミニ辞典として使うこともできます。
- 3 上段には見出し項目ごとに、識別の対象となる小項目を掲げ、下段にその識別の方法を簡潔に記しました。

また、中段は問題形式になっているので、必ず解答しながら知識を定着してゆきましょう。

4 敬語編では、上段で標準的な敬語理論のあらましを解説しました。これだけは確実に理解してください。

5 毎日の終わりに【発展演習】として、最近の入試問題を採録してあります。理解度の確認と仕上げのために挑戦しましょう。

6 付録として、「助動詞活用表」「助詞一覧表」を載せました。

7 別冊解答書には、【解答】のほかに、【解説】と問題文すべての【口語訳】とを付けました。有効に利用してください。

本書によって、大学入試の文法分野では最要の、識別・敬語の知識が確実に身に付くことを期待しています。

編著者

《目次》

第1日	え・か・が・聞こえ・けれ・こそ	4
第2日	し・しか・して・す・ず・せ	8
第3日	候ふ・奉る・給ふ・たり・て・で	12
第4日	と・とも・な・など・なむ	16
第5日	なり・に・にて・ぬ・ね	20
第6日	の・ば・侍り・ばや・む・や	24
第7日	ら・らむ・る・れ・を	28
第8日	敬語の種類	32
第9日	主な尊敬語・謙讓語・丁寧語	36
第10日	注意すべき敬語	40
付録	古典語助動詞活用表	44
	古典語助詞一覧表	46

え・か・が・聞こえ・けれ・こそ

【問】各項目ごとに、傍線部は上段のどれか、番号で答えよ。

- ① え
- 1 下二段動詞「得」
 - 2 ヤ行下二段動詞の語尾
 - 3 副詞
 - 4 上代の助動詞「ゆ」
- ② か
- 1 疑問の係助詞
 - 2 反語の係助詞
 - 3 詠嘆の終助詞
- わが思ふままに、そらにいかでかおほえ語らむ。^a (更級)
- 忘れがたく口惜しきこと多かれど、え尽くさず。^b (土佐)
- 男は、この女をこそえめと思ふ。^c (伊勢)
- 白珠は人に知らえず^d 知らずともよし (万葉)
- 白露を玉にもぬける春の柳か^a (古今)
- いづれの山か^b 天に近き。 (竹取)
- あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。^c (徒然)
- 童べと腹立ち給へるか。^d (源氏)

↑1は文節の先頭にあり、未然形か連用形。
 2は「ゆ」に置き換えると切れる。
 3は文節の先頭にあり、下に打消語を伴う。
 4は四段・ナ変・ラ変の未然形接続。意味は自発・可能・受身。

↑1・2とも文中にあるときは係り結びとなり、文末を連体形で結ぶ。なお、文末用法もあるので注意（これを終助詞とする説もある）。
 3は主に和歌の句末にあり、詠嘆を表す。

- ③ が
- 1 連体格の格助詞
 - 2 主格の格助詞
 - 3 準体格の格助詞
 - 4 単純接続の接続助詞
 - 5 逆接の接続助詞
 - 6 願望の終助詞の一部
- めでたくは書きて候ふが、難少々候ふ。^a (著聞)
- 雀の子を犬君が逃がしつる。^b (源氏)
- 女二人ありけるが、姉は人の妻なりける。^c (宇治拾遺)
- 妙観が刀はいたくたたず。^d (徒然)
- 世の中にさらぬ別れのなくもがな^e (伊勢)
- いかなれば……兼久がはわろかるべきぞ。^f (宇治拾遺)
- かしこきみかけをば頼み聞こえながら^a (源氏)
- これ、昔、名高く聞こえたる所なり。^b (土佐)
- 天下のものの上手といへども、初めは不堪の聞こえもあり^c (徒然)

↑1は体言・連体形接続。下の体言に続く。
 2も体言・連体形接続。下の用言に続く。
 3は体言接続。…ノモノの意をもつ。
 4は連体形接続。…ガ…ノダガの意で、読点を打てる。
 5も連体形接続。…ケレドの意で、読点を打てる。
 6は「もが・もがな・てしがな・にしがな」などの一部。

↑1はウワサ・評判の意。
 2はヤ行下二段活用。ウワササレル・申シアゲルなど。
 3は上の動詞に謙譲の意を添える。オ…申シアゲル。

⑤ けれ

1 過去の助動詞「けり」の一部

2 推量の助動詞「べし」の一部

3 打消推量の助動詞「まじ」の一部

4 願望の助動詞「まほし」の一部

5 力行四段動詞の語尾+存続の助動詞「り」

6 形容詞の語尾

□ 財多ければ、身を守るにまどし。

(徒然)

□ 野分のあしたこそをかしけれ。

(徒然)

□ つらきゆかりにこそ、え思ひ果つまじけれ。

(源氏)

□ 己が君の仰せ言をばかなへむとこそ思ふべけれ。

(竹取)

□ 見に行かまほしけれど、さらに道もおぼえず。

(宇治拾遺)

□ 忘れ貝寄せ来て置けれ沖つ白波

(万葉)

□ かうこそ燃えけれど、心得つるなり。

(宇治拾遺)

□ 「北殿こそ、聞き給ふや。」

(源氏)

□ 折節の移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ。

(徒然)

⑥ こぞ

1 強意の係助詞

2 呼びかけの接尾語

発展演習 1

建保のころ、宮のうちの女房の夢に、冠したるものあまた参りて、「劍璽を入れたてまつるべきに、おのおの用意してさぶらはれよ」といふと見てければ、いとあやしくおぼえて、宮に語りきこえけれど、「いかでさほどのことあらん」と思しもよらで、つひに御髪をさへおろしたまひて…… (増鏡)

問 傍線部「きこえ」と文法的に同じはたらきものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア これ、昔、名高くきこえたるところなり
- イ 竹の中より見つけきこえたりしかど
- ウ 先帝の四の宮の、御かたちすぐれたまへるきこえ、高くおはします
- エ そのころ都にきこえたる白拍子の上手
- オ 菩薩は、色にも現ぜず、心にも離れ目にも見えず、香にもきこえたまはず

発展演習 2

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目を覚ましつ

(古今)

問 傍線部「わびしけれ」の文法的説明として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 動詞「わぶ」の連用形+助動詞「き」の連用形+助動詞「けり」の已然形
- イ 形容詞「わびし」の命令形
- ウ 動詞「わぶ」の連用形+動詞「す」の連用形+助動詞「けり」の已然形
- エ 形容詞「わびし」の已然形

↑1は連用形接続。

2は前が「べ」。本来「べけれ」で一語。

3は前が「まじ」。本来「まじけれ」で一語。

4は前が「まほし」。本来「まほしけれ」で一語。

5は前が動詞の語幹。本来「〇け/れ」となるもの。

6は前が形容詞の語幹。本来「〇〇(し)けれ」で一語。

↑1は文中にあるときは係り結びとなり、文末を已然形で結びぶ。

2は人名などに付き、呼びかけを表す。：サン。

ヒント解法

1 まず、傍線部の前後を単語に分ける。

語り/きこえ/けれ/ど

「きこえ」の前に「語り」と動詞の連用形があるので、この「きこえ」が補助動詞になることは明らか。

2 これも単語分けさえ正しくできれば、すぐに答えが出る。

秋/こそ/ことに/わびしけれ

選択肢にはないが、「わびし/けれ」と切るのも誤り。「けれ」を過去・詠嘆の助動詞とすると、直前は連用形のはず。